

——わたしは、だから縛られぬ。

さらに、むずかしいことではあるが、おのれを縛るおのれを超越することだ、と摯は、どこまでもひろがる有莘の野をみたとき、豁然とするおもいがした。青天白日のもとで、独り佇立していると、夏と商の暗闘など、別の世界のこのようなようである。桀にしろ、湯にしろ、その生死は重い。それにくらべて、

——わたしの生死の軽さはどうだ。

と、おもったとき、摯は、心から温かいものが湧きあがってきて、笑みが浮かび躍動した。ひとつ悟ったのである。「王や后にまさるのは、この軽さよ」と胸のなかで、何度も叫びながら、彼は野を奔った。

——宮城谷昌光作 「天空の舟 小説・伊尹伝」下 湯の訪問 12頁より

逮捕されると、職を失ったり、社会的信用が下がったりします。

元々、無職で社会的信用が皆無の人にとっては逮捕というのは、なんのリスクにもならないのですね。

（中略）

ちなみに個人的に、こういう人を「無敵の人」と呼んでいたりします。

——西村博之「無敵の人の増加。…ひろゆき@オープンSNS」より



そして、一時の幻想は去り、定常の現実が戻る。

「……勝っちゃったねえ。本当に」

無論、正確には適当なところで、連合軍は帝国軍と停戦条約を締結した。それどころか、条約には降伏に近い部分もあった。とはいえ、ポウディツカは

——アツザフル帝国軍のテイルナノグからの全面撤退

の一文を以って、満足した。何しろ、当初は無条件降伏も視野に入れていたのだ。

この辺り、後世の歴史家がこの戦いを日露戦争と比較する由縁だろう。小国である日本やテイルナノグにとっては、最初から勝ち目のない戦争なのだ。奇跡的な勝利によ

って生み出した優位を活かきぬ手はない。

とはいえ、それは国と国との話であって、アルルクシル個人には別の話である。

「はははは、やっぱりねえ……」

ウルルからの書面——その内容は言うまでもない。

「これで僕は無職だ」

悲嘆のままに寝転ぶと、忠勇なるチーシュイが苦笑しながらも誘惑してきた。

「それなら、あの勝利の勢いに乗じて、こちらから、帝国本土に攻め込めばよかったじゃないか。実際、そういう声もあったのだろう？」

「あつたよ。あつたけどねえ……」

それをアルルクシルは

——「馬鹿を言うてはいけません」

と一蹴したのであった。

——「彼我の国力差は圧倒的です。戦術的な勝利を幾ら重ねようとも、戦略的な敗北は確定しています。幸い、今なら、有利な条件で和平に持ち込めるでしょう。それで満足すべきです。どうしても、逆侵攻を成功させたいのならば、それこそ、今は屈辱の講和に耐え、平和の下に内政を重んじ、彼我の国力差が逆転する瞬間を待つべきです」

滔滔と説くと、彼らは嬉々として尋ねてきた——「では、その瞬間はいつですか？」と。

こうなると定量的に答えねばならない。それこそ聖女ヒュパティアの名にかけて！

——「その瞬間は……多分、あと百年以上は先になるかと」

その一言でアルルクシルの運命が決まった。

あの判断が間違っていたとは思わない。『奴隷として生きるか、人間として死ぬか』の二択なら、『奴隷として生きる』方を選ぶ。それでいい。もし『人間として死ぬ方を選ぶ』連中が増えたというのなら、それは二択が『奴隷として死ぬか、人間として死ぬか』になっているということだ。

だが、それはアルルクシルの存在意義を否定する判断でもある。とりあえず、

——「今後のことは、ぜひとポウディッカ姫にお任せになりますよう。この戦もまさに彼女が勝利の礎でした」

という部分だけは強調しておいた。

あの勝利は幸運の産物であった。つまり、国力差がありながらも『幸運があれば勝利を得ることができる』ところまで、条件が整っていたのだ。そしてそれを整えたのはやはりポウディッカである。アルルクシルは、実のところ、その母王であるアンドラステの事も高く評価をしているのだが、やはりアンドラステの本領は守勢においてこそ発揮されるものだ。今後はより攻撃的な中央集権政策で望まねばならないティルクナノーグ女王にはポウディッカの方が相応しい。

実際、彼女の名は発音こそ遷移しながらも後世に残り、ボウディツカ王朝の祖として祀られることになるが——それはまた別の物語である。

「まあ。人は、無職として産まれ、無職として死ぬものさ」

さすが奴隷はこの手の逆境に強い。だが、まともに飢えた記憶のないアルルクシルにとっては苦悩の極みである。

思わず頭を抱え、ごろごろと寝転がる。

「ああ、年金も払えないよく、保険もなくなるよく、本も買えないよく」

アルルクシルが煩悶していると、チーシュイが「ほらよ」と手紙を差し出した。

「何これ？」

「お前宛の郵便だ。表題だけ見えたが、招聘したいんだとさ」

「招聘？ 召還ではなく？」

「……無職の分際で『召還』なんてされるわけないだろ？」

たしかに、最早ウルルの下で働いているわけではない。『召還』されるいわれはない。

「なんだかんだとって、帝国は実力主義だ。たとえ、敵としてであっても、あれだけの事をやってのけた人材は敬意を以って扱う——そういうことだろう？」

「ああ、なるほどね」

「しつかりしてくれよ。これはお前が予測し判断すべきことだぜ。何故、全身これ筋肉の剣闘士上がりか説明せねばならん」

「……ははは」

この辺りが蔑まれるだけの半生を過ごしてきたアルルクシルの病なのだろう。

同時にアルルクシルは己の奴隷から

——甘えを捨てる。

と言われた気がした。

自分は既に道を外れている。いや元々、道に乗れるほどの男ではなかったのだ。

——そして、道に乗れない者は、道を創るしかないのだ。

それが古今東西の無能に共通する宿命というものなのだろう。

「チーシュイ、ごめん。僕は『君の救世主』にはなれないかもしれない」

「……何故だ？」

「君が優秀だからさ。多分、八年前に君を救ったのも別人だろう」

「……そうかもしれないな」

「悪いね。僕はより普遍的な弱者、駄目人間、ヘタレ野郎にとっての救世主になるよ」

「ヘタレ系救世主——伝説だな。それも悪くない」

奴隷は何故か満足げに頷いた。